平成３０年度　【　就労・日中　】支援部会報告

部会テーマ【地域生活を支える日中事業所の支援】

部会開催	○世話役会議（5/29） ●第１回部会（6/25）　参加者　２９名 ・昨年度の振り返り、今年度のテーマと部会の年間計画 ・テーマ：社会性を育むために行っている支援について
	○世話役会議（１０/１０） ●第２回部会（11/12）　参加者　２３名 ・前回の振り返りと今年度の全体交流会について ・テーマ：私たちがしたい（利用者にとって必要な）支援について考える
	全体交流会(12/7)
	○世話役会議（1/25） ●第３回部会（2/25）　参加者　２２名 ・前回の部会の内容の確認 ・　テーマ：　利用者工賃の確保にむけて～工賃保障と仕事の確保について考える
テーマについて深めた点	・事業所の支援の向上にむけて 作業への支援だけでなく、利用者の社会性を育てるための支援など、職員のスキルアップが求められている。職員集団としての力を高めるために、ケース会議や研修の機会を大事にしたいと思っているが、現状は人手不足や記録等の業務量も多く、十分に実施できていない。 ・困難を抱える利用者の支援について 通所が安定しないなどの困難を抱える利用者もいるが、相談できるネットワークがないため問題を外に持ち出すことができず、事業所内で抱え込んでいる。 ・工賃保障について 各事業所の工賃保障の現状には差があるが、安定的な仕事や販路先を見いだせないことや、Ａ型・Ｂ型事業でも工賃は上がっていないこともある。現状の水準では、障害基礎年金と合わせても生活を支える収入にはならないなど、現状を交流した。
部会のまとめ	・事業所の支援の向上にむけて どの事業所も職員確保と共に、職員育成を意識しているが、人的・時間的理由からなかなか取り組めていない現状にある。 事業所の支援の質の向上のためには、月１回でも職員会議の定例化が必要と言える。また、身近な事業所間での研修なども考えられる。 ・困難を抱える利用者の支援について ア、必要な場合は、事業所内でケース検討会議を持つことが大事である。職員の見方や支援を一致させるための機会として、考えてゆきたい。そのことが支援の向上にもつながる。 イ、本人が利用している他のサービス事業所と、検討の場を持つことも必要である。基幹相談支援センターに相談して、関係者を招集してもらうことも考えられる。

平成30年度　【　入所・グループホーム　】支援部会報告

部会テーマ【　豊かな地域生活を支えるために　】

部会開催	○世話役会議（7/6） ●第１回部会（7/20）　参加者　９名 ・昨年度の振り返りと今年度の部会テーマ、年間計画の検討 ・今年度の自立支援協議会「全体交流会」について
	全体交流会（12/7）
	○世話役会議（11/27） ●第２回部会（12/18 ）　参加者　13名 ・全体交流会実施後の報告と感想 ・日中サービス支援型GHについて（障がい福祉課より） ・上記についての意見交換
	○世話役会議（1/31） ●第３回部会（3/6 ）　参加者　29名 ・世話人研修会「成人病・老化防止・便秘解消の食べ合わせについて」 講師　橋本 奈里紗氏（クリエイトしき 管理栄養士） ・意見交換
テーマについて深めた点	・ＧＨ利用者の高齢・重度化の増加 通院・入院が増加し、介護度も高くなっており、これまでの世話人体制では難しくなっている事例が増加。設備改善が必要でも賃貸物件では不可。 また、日中をＧＨで過ごしたい日もあるが、支援体制が作れず、本人の希望に沿った支援ができない。 ・親の高齢化による本人支援の問題 親の死去や要介護状態になることで、これまで親が担っていた本人の買い物、サービス利用の手続き、通院付き添いなどの役割を、どこが担うのか。 ・ＧＨが増えてゆかない問題 世話人不足が常態化しており、ＧＨが開設できないことが大きい。数人が暮らす建物を見つけることも困難である。
部会のまとめ	・高齢化・重度化に伴う支援 高齢化・重度化により日常の健康管理が重要になっており、地域の医療機関との連携体制作ってゆく必要がある。また、高齢化による設備改善が賃貸建物では困難があり、今後の建物のあり方を検討してゆく必要がある。 高齢化した人がＧＨで暮らし続けられる制度にはなっておらず（日中支援は考慮されていないなど）、高齢障害者の暮らしの場の検討が必要である。 ・親の高齢化への支援 親が担ってきた金銭管理・サービス利用の手続の役割は、成年後見制度の利用で可能だが、制度利用が進んでいない。それ以外の通院付き添いや買い物などは、どこが支援するのか。親の高齢化を視野に入れた支援体制を考える必要がある。 ・ＧＨ拡充のための世話人不足の解消 暮らしの場としてＧＨの拡大は必要であるため、人件費など労働条件改善にむけた報酬改定や日中支援に報酬を付けることが必要。 物件確保にむけたバックアップ。

平成30年度　【　地域生活　】支援部会報告

部会テーマ【　豊かな地域生活を支えるために　】

構　成　員【　居宅介護事業所　】

部会開催	○世話役会議（5/10・6/21） ●第１回部会（6/21）　参加者　９名 ・前年度の本会議・サブ協議会等の報告 ・テーマに基づいて事業所間の連携について意見交換
	○世話役会議（10/13・11/13） ●第２回部会（11/20）　参加者　９名 ・障害福祉サービスを受けておられる家族に参加してもらい、話を聞く
	全体交流会（12/7）
	●第３回部会（1/29）　参加者　16名 ・研修「カウンセリングヘルパー」 講師　山本 昌幸氏（グローライフ介護スクール）
テーマについて深めた点	・サービス利用について 介護保険では、ケアマネージャーを中心にサービスの枠組みが出来ており、サービス担当者会議で他職種と関わりを持ち、連絡が取り合える。しかし、障害福祉サービスはセルフプランが多く、また、他職種間の連携が取りにくいため、ヘルパー事業所が窓口となり動くケースもある。 ・ヘルパー確保 利用者宅への訪問回数が多く、複数の事業所で連携を取りながら対応しているケースもあるが、ヘルパーの離職などにより十分カバーできず、一事業所の負担が大きくなっている。
部会のまとめ	・サービス利用について 現状はセルフプランが多いが、ヘルパー事業所が利用者のサービス利用の相談を受けるなど、事業所の役割を越えて担っていることが大きい。障害福祉サービスにケアマネがいない、などの問題がある。サービス利用の枠組みやサービス担当者会議について、検討する必要がある。 ・地域生活を支えるためにヘルパーの確保が必要 ヘルパーは、本人や家族の思いを受け止めたり、多様な障害に対応しなければならなかったりしており、精神面でも負担が大きく、そのことが離職につながっていることも多い。ヘルパーの離職を防ぐためには、ヘルパー自身のメンタルケアを考えてゆく必要がある。

平成30年度　【　障害児　】支援部会報告

部会テーマ【　一人の子どもを真ん中に　】

構　成　員【保健所・保健センター・支援学校教員・医療型児童発達支援センター
児童発達支援・放課後等デイサービス・日中一時支援・居宅介護・短期入所事業所】

<table>
<tr><td rowspan="4">部会開催</td><td colspan="2">○世話役会議（9/7）
●第１回部会（9/19）　参加者　２３名
・昨年度まとめ、本会議報告
・各機関より活動状況の報告
・今年度のテーマと協議内容、やおっこファイルの普及について検討</td></tr>
<tr><td>○世話役会議（11／5）
●第２回部会（11／21）参加者 17 名
・グループワーク 未就学児支援機関中心
「子どもを支えるネットワークづくり」
（支援を必要とする児・家族の把握⇒各機関へつなげる流れの確認、エコマップづくりに取り組む）</td><td>○世話役会議（11/5）
●第３回部会（11/22）　参加者 12 名
・グループワーク 放課後デイ事業所中心
「個別支援計画づくり」
（架空ケースをアセスメントして共通の書式で初回計画に書き込む）</td></tr>
<tr><td colspan="2">**全体交流会**（12/7）</td></tr>
<tr><td colspan="2">○世話役会議（12/25）
●第３回部会（1/17）　参加者２１名
・グループワークの振り返りと今後の協議内容、取り組みの検討
・“やおっこファイル”の改訂について（さらなる普及につなげるための改訂）
協議結果、“やおっこファイル”改訂について、別途委員会を結成。１/31、３/１協議</td></tr>
<tr><td>テーマについて深めた点</td><td colspan="2">・サービス利用全般の増加と複雑なニーズへの対応
地域で生活する医療ケア児が増加し、児発事業利用開始の低年齢化がめだつ。働く母親の増加等により週末、長期休暇中も連日放デイを利用しているケースがあり、子どもも現場も疲弊気味である。不登校児、引きこもり児への対応についても、放デイが必要となっているケースもある。
・連携の重要性
連携の重要性については、参加機関全体では共有できており、ケース会議等の取り組みも活性化している。参加機関間での連携を促進するためのアイデアもいくつか出されたが、「福祉⇔福祉」のみならず「福祉⇔教育、保育」「福祉⇔医療」の連携づくりと、それを担う人材が課題になる。</td></tr>
<tr><td>部会のまとめ</td><td colspan="2">・サービス利用全般の増加と複雑なニーズへの対応
問題、課題を抱え込まずに出し合ったり、相談できたりする環境が必要で、「一機関　対　利用者」ではなく、利用者を中心としたネットワークが必要である。
・連携の重要性
ケース会議等の取り組みを継続してゆく。また、連携促進のとりくみ、及びやおっこファイル等のツールの活用を通じ、「切れ目のない支援」をめざす。
・ニーズの増加と複雑化に対応する資源不足について、検討を続ける。（特に短期入所施設、および、医ケア児対象の社会資源）</td></tr>
</table>

平成30年度　【　精神保健　】支援部会報告

構　成　員【精神科病院・精神科クリニック・就労継続支援事業所・八尾保健所・
八尾市社会福祉協議会・相談支援事業所　　等精神保健に関わる機関 】

部会開催	○世話役会議（4/4・4/18・5/9・6/6） ●第１回部会（6/13）　　参加者　６０　名 テーマ「自分の課題はみんなの課題～顔を合わせて相談しよう～」 ・新年度の顔合わせと自己紹介を行う。 ・上記のテーマについてグループで悩みの共有と課題の抽出を行う。
	○世話役会議（7/18・8/22・10/10） ●第２回部会（10/17）　　参加者　４０　名 テーマ「災害について考える」 ・八尾市障がい福祉課より「災害に対する八尾の取り組みについて」の話 ・事業所地区ごとに分かれてグループワーク。各事業所の対策の共有、今後取り組めそうなことを話し合う。
	全体交流会（12/7）
	○世話役会議（11/14・12/5・1/30） ●第３回部会（2/6）　　参加者　３０　名 テーマ「社会資源について考える」 ・八尾市障がい福祉課より「障害福祉計画」についての話 ・グループワーク「八尾のストレングス」「現状・地域課題」について。八尾市のストレングスや他市との違いを考える。
深めた点	・部会以外にも事業所見学会や精神疾患に関する勉強会（精神科医や府発達障がい者地域支援マネージャー事業による研修）を実施した。 ・グループワークで支援力の向上を図り、関係機関のネットワーク構築を強化した。また長期入院者の退院促進課題に関しては、地域移行支援の現状と課題について共有し、深めた。 ・八尾市の地域課題やストレングスを共有し、支援者間のみでは解決しない制度等について話し合い、市へ課題を挙げていく必要を確認した。
部会のまとめ	・協議の場（民官）の設置が必要 精神障がい等の生活のしづらさを持つ人への、八尾市での支援体制や目指すものを確認し、取り組む必要がある。協議の場を持つことで、地域全体を共に考え、一体的な取り組みに発展することができると考える。 ・グループホームやショートステイ、余暇活動の場の設置が必要 ＧＨやヘルパーなどを利用して、家族と離れて地域生活できることを知らず、想像もつかない人もいる。今後、親から自立できる場としてＧＨの設置は不可欠であり、自立生活をイメージするためのショートステイや体験利用の場も必要である。また、余暇活動等利用できる場の設置が必要となる。 ・高齢分野の支援者との連携強化や制度の改善が必要 高齢障がい者が増えている中、介護保険関係の支援者と連携強化し、本人にとって必要な支援を協議する必要がある。「介護」と「社会参加」という目的の違う制度や個々の支援の在り方について検討していく必要性がある。 ・地域への啓発活動が必要 精神障がいの理解促進・発達障がいやうつ病等の教育現場等への啓発など、生活のしづらさを持つ人への合理的配慮や地域住民への障がいの理解促進が、施設設置や人員確保、偏見の改善につながる。